

小倉康寛『ボードレールの自己演出—『悪の花』における女と彫刻と自意識』  
(みすず書房、2019)

本書は、小倉康寛氏が自身の博士論文（一橋大学、2017年提出）を大幅に書き改めたうえで出版した500ページを超える大著である。本書の副題からもその片鱗が窺える「愛する女の彫刻化」という独自の視点から、生成研究の論点も押さえつつ『悪の花』の再解釈が試みられる。ボードレールに関する翻訳書やエッセーは近年も頻繁に出版されているが、単著の研究書が刊行されるのは、2006年の岩切正一郎氏による『さなぎとイマーゴ』以来ではなかろうか。専門を同じくする研究者にとっては、近年の研究動向を把握するうえでも非常に有益な著作であり、特にこれからボードレール研究に着手しようという若手研究者にとっては必読の一冊と言えよう。もちろん一般の読者にも読みやすいよう文体や構成が配慮されており、本書はボードレールの詩学についての優れた入門書ともなっている。

全体像を確認しておくとして、本書は「自己演出と芸術」（全3章）、「彫刻と想像力」（全4章）、「『悪の花』読解」（全5章）の全3部（全12章）で構成されている。「小帰結」が付された各章はそれ自体でも独立した論文として読むこともでき、読者は自身の関心に最も近そうな章から読み始めることもできる。ただし本書はけっして雑多な論文の寄せ集めなどではなく、3部構成の各部が異なる切り口、異なる語り口からボードレールを論じることで、その積み重ねにより最終的に奥行きのある立体的な詩人像を構築しており、その点にこそ本書の最大の魅力があるだろう。

まず第1部は、あたかも推理小説の探偵を思わせるような理知的な語り口となっている。これには小倉氏が最近研究に着手しているエドガー・ポーの影響があるのかもしれない。豊富な資料を元に、無駄を省いた簡潔な文による推論を積み重ねて、小倉氏はこれまでのボードレール研究において指摘されることのなかった幾つかの結論にたどり着いている。この点については後述したい。

つづく第2部の語り口は、歴史家のものである。著者は詩と彫刻の両分野を行き来しつつ、古代から19世紀までの西洋美学の変遷を丁寧に辿って見せる。小倉氏はこれまで18世紀の美術史家ヴィンケルマンとボードレールの関わりについて論じてきたことが知られ

ボードレールの自己演出

『悪の花』における女と彫刻と自意識

小倉康寛



Charles Baudelaire.

みすず書房

---

ているが、この第 2 部においてはそのような個別の論証が組み合わさり、一つの流れとして結実していることを読者は目撃するだろう。また、ボードレールが彫刻を「退屈」と評した理由について、19 世紀なかばの時代背景をもとに詳しく検証している点も興味深い。

最後の第 3 部の語り口は、ここまでの 2 つの語り口と比べるとそれほど目新しいものではない。小倉氏は、自らが先行研究として挙げているモソップ、ベルサーニ、リヒターといった先人の語り口を踏襲しているかのようだ。ただし彼らのように詩集から一つの物語を紡ぎ出そうとすることには限界がある。小倉氏は、『悪の花』初版の詩篇の配列には「百一の階乗通り」の可能性があったとしたり、ボードレールが最終的に選択した配列に込められた意図を推測するという客観的な立場をとっている。先行研究と小倉氏の手法を分かちもう一つの点として、全 3 部による本書の構成という利点がある。第 1 部・第 2 部で行ってきた綿密な議論を背景とし、その議論の結果を第 3 部において絶えず援用することで、詩人の実人生や歴史的背景との関連性に基づいて『悪の花』の各詩篇やその配列の意義を読み解くことが可能となっているのである。この点において、本書は 3 つの異なる領域の研究を足し合わせたものではなく、最終的に「詩集の全体性」の理解という一つの目的に向かって、周到に計算して再配置されたものであることに読者は気付かされる。その事実は詩集『悪の花』の成立とも重ね合わさり、小倉氏のボードレールに対する深い情熱と敬意を窺い知ることができるだろう。

ちなみに、評者が個人的にもっとも関心を抱いたのは、小倉氏が最後に執筆したという第 1 部「自己演出と芸術」である。第 1 章の『悪の花』の演出』では、『悪の花』は自伝的な作品でも完全な虚構でもなく、作者が自伝的な内容をもとにして自己演出した作品として読むべきであるという主張が展開される。そのなかで小倉氏は、詩集の発表以前の若かりしボードレールが記した作品や書簡などを紐解くだけでなく、詩人とともに「ノルマンディー派」という詩人グループを形成していたル・ヴァヴァスールなど、これまであまり注目されてこなかった周辺人物による一次文献を多数紹介している点が注目に値する。そのような資料から導き出されるのは、ボードレールがドゥゾワ夫婦の店舗にて日本製の書見台を購入していたという仮説や、執筆時期の異なる原稿をハサミと糊を用いて実際に貼り合わせて推敲していたという仮説であり、読者は詩人の実人生を垣間見ているかのような胸の高鳴りを感じることだろう。また、第 2 章はこれだけで独立させて読んでも一級のボードレールの「ダンディー論」入門となっている。おそらく第 1 章・第 2 章を読み進めてみれば、読者の多くは本書の魅惑的な語り口と議論とに引き込まれ、全 12 章を飽きることなく読み通してしまうことだろう。

以上のとおり、本書は著者である小倉康寛氏の幅広い関心と資料収集の結果に基づく本格的なボードレール研究書であり、今後の小倉氏のさらなる活躍をおおいに期待させる一冊となっている。

(廣田大地)